

平成 22 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 19 年～平成 21 年

課題番号：19510284

研究課題名（和文）多様なひとり親家族の韓日比較 - 未婚・非婚・既婚の親子のジェンダー分析 -

研究課題名（英文）Cross-cultural Research Study on single parent families in Korea and Japan
-Gender analysis about single parents unmarried, cohabitation, and married -

研究代表者

竹田 美知（TAKEDA, Michi）

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部 生活学科 都市生活専攻 教授

研究者番号：00144634

研究成果の概要（和文）：

日本と韓国では、少子化が解消されない中で、ひとり親家族が増加している。未婚、離別、死別など様々な状況にあるひとり親家族の多くは経済的な問題とともに社会的偏見による問題を抱えている。そこでこの調査は、特にひとり親家族に対する社会的イメージに焦点を当て、これから家族を形成する大学生を対象として調査を行った。日本での調査は、2007年7月に九州、近畿、東海、東京の各大学に所属する大学生を対象として行った。配布数 1796、回収数 1379、回収率 76.8%であった。大学生の家族イメージに、世間のひとり親の否定的イメージが大きな影響を与えていた。そして家族の授業をうけていない学生もひとり親に対して否定的イメージを持っていた。韓国では大学生を対象に 2007年10月から11月の間に、2000部の調査票を配布し、1605人から有効回答を得た。有効回答率は 80.3%である。分析の結果は以下のとおりである。第1の将来のライフコースについては、大学生の8割に近い人が、就職、結婚、出産の順によるライフコースを経験することを望んでいた。第2のひとり親の子育てに関する大学生の意識は、未婚、離婚、死別の背景により異なった。大学生が最も否定していたのは、未婚の親の子育てで、最も理解していたのは、死別によるひとり親の子育てである。第3の大学生がひとり親の子育てに対して肯定的な意見を持つのに最も影響を与えた要因は、ひとり親の子育てに対する世間のイメージであることから、社会で形成されている価値観に多く影響を受けていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The number of one-parent families has been growing as Japan's fertility rate has been staying so low. People become one-parent families for different reasons such as their single status, separation or spouse's death. Many of them suffer from social prejudice as well as financial difficulties. The purpose of this research was to clarify what creates images toward one-parent families.

The survey in Japan was delivered to university students, who have the potential to

create a family in near future, in the Kyushu, Kinki, Tokai, and Tokyo districts in Japan in the month of July, 2007. The number of distributed questionnaire sheets was 1796. The number of collected sheets was 1379. The collection rate was 76.8%.

It was clarified that the students who were influenced negatively by public opinions and had not studied family studies had negative images toward one-parent families. In order to minimize those negative images, it is necessary to improve home economics education in Japan in which we teach family studies including one-parent families

In Korea, the questionnaire sheets were delivered to 2000 Korean university students between October 2007 and November 2007. The valid responses were 1605, which was 80.3 % out of the 2000.

The findings are as follows: 1. Regarding life course, close to 80 % Korean university students wanted to experience life events such as getting a job, marriage and having a child in this particular order. 2. Image toward single parents' child rearing was different depending on the reasons to become single parents: unmarried, divorce, or spouses' death. The most negative image was given to unmarried single parents' child rearing. The most acceptable image was fallen to single parents because of their spouses' death. 3. The Korean university students' positive image toward single parents' child rearing was influenced mostly by the public image toward single parents' child rearing. It showed that socially constructed values make a strong impact on university students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	1,700,000	510,000	2,210,000
20年度	1,300,000	390,000	1,690,000
21年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：複合科学

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：ひとり親 社会的価値観 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

日本では、少子化が進み子どもの数が減少している。しかし 18 歳以下の子どもを持つひとり親、特に母親は増加している。1975

年には、母親と 18 歳以下の子どもからなる家族は 1.1%であったが、2004 年には 1.4%と増加している。将来もこの傾向は一層顕著になると思われる。父親と子ども、母親と子

どもからなるひとり親家族全体は 2000 年で 7.6%であるが、2025 年には 9.7%に増加するものと推計されている。

このようなひとり親の増加の理由の主要な原因は、親の離婚である。人口の減少によって結婚数は減少しているが、離婚率は増加している。欧米のように未婚の夫婦関係から生まれた子どもの数は、日本の場合、それほど多くない。未婚で子どもを持つことに対する社会的偏見がこのように未婚で生まれる子どもの数を抑えていると思われる。「できちゃった婚」という言葉が日本では流行しているが、未婚で子育てをすることを避けるために、子どもを妊娠したカップルは法的に結婚することを余儀なくされる。そして、未婚、離別、死別など様々な状況にあるひとり親家族の多くは経済的な問題とともに社会的偏見による問題を抱えている。

一方、韓国では、2005 年現在、核家族世帯が 71.6%、その他の親族世帯が 7.0%、非親族世帯が 1.4%、単独世帯が 20.0%である。核家族世帯のうち、ひとり親世帯は 8.6%であり、7.9%であった 2000 年と比べると 0.7%増えている。ひとり親世帯になった経緯は、死別や離婚、未婚、遺棄など様々であるが、近年は離婚によるものが増えている。このようにひとり親世帯は年々増加の傾向にあるが、ひとり親家族の多くは経済的に困難な状況に置かれており、ひとり親家族に対する社会の偏見などにより、生活における様々な問題を抱えている。

2. 研究の目的

1) ひとり親家族を研究対象としたとき、どこまでの範囲をひとり親とするか。さらに様々なひとり親のどのようなタイプに着目する必要がある。

2) ひとり親家族に「多様なパターン」が見

られる。このパターンは主に親の特徴から分類されているが、子の視点からの「多様なパターン」を展開する必要がある。

3) ひとり親の調査は、「全国母子世帯等調査」などのように親に焦点をあてた調査が多い。子の視点が必要である。

4) ひとり親になった過程の分析はライフコース分析が考えられるが、子の視線からのライフコース分析も必要である。

5) ひとり親家族における親族（主に親）との同居についてである。親との同居に求められていることは何かを検討する。

6) ひとり親家族において親族、つまり親と同居する率が高まっている理由についても調べたい

7) 貧困の世代間連鎖を解消するという視点からもひとり親家族が抱える経済的問題の解決により目をむける

8) インタビューによる質的調査では、以上のことを踏まえて、ひとり親家族においても「子どもの自立は遅れているのか」、それとも「父母のいる核家族」より「早く生計の担い手になりたい」と考えているのかなど、ひとり親家庭における子どもの自立について明らかにしたい。

3. 研究の方法

平成 19 年度前半は、ひとり親家庭の子どもたちを取り上げた韓日両国の国内外の文献レビューを行った。まず、「ひとり親家庭」を取り巻く社会状況の変化を、「遺族としてのひとり親家庭」から「非婚・離婚を選択したひとり親家庭」にいたるまで多様な「ひとり親家庭」に焦点をあてて、歴史的アプローチを試みた。「ひとり親家庭」を見る世間の眼がいかに変化したかを、戦後から現在にいたるまでの新聞や雑誌の「ひとり親家庭」に関する記事や身の上相談の分析を通して明

らかにする。さらに、行政の施策の変遷も合わせて文献調査を行った。

平成 19 年度後半から平成 20 年にかけては、韓日の大学生を対象として、「未婚、非婚、離別、死別のひとり親家庭」の親と子どもに対するイメージを明らかにするためにアンケート調査を行った。これから形成する家庭について彼らが、世間のまなざしにどのように囚われているか、特にライフコースのターニングポイントに焦点を絞って質問項目を作成した。たとえば、出産、結婚、同棲、入籍、別居、離婚、子との別居などについて、その順序や意思決定を規定する要因に着目し。いかに社会的な価値観に影響されているかについて明らかにした。たとえば「出来ちゃった婚のように、親子関係を結ぶことと夫婦になることが同一視される風潮がどのようなプロセスで正当化されるか」、「なぜひとり親で育つことより二人親で育つことがよりよいとされるか」、「母子で育つことが、父子で育つことより自然とされるか」、「ひとり親で育った子どもと親との関係が二人親より、なぜ密着しすぎた関係とみられるか」など、「ひとり親家庭」を取り巻くステレオタイプを明らかにした。同時にひとり親家庭の親からも、子育ての体験を聞きとり、親の眼をとおして見た「世間のまなざし」、親の就業状況、親のサポート状況を明らかにした。

平成 20 年度から平成 21 年度にかけては、日韓のインタビュー調査を実施した。日本と韓国において、大都市に居住するひとり親と子どもを中心に、属性、ライフコース、親子関係、離別や死別などの受け止めについて、親族との関係、サポートネットワーク、地域との関係、行政からの援助など子どもと保護者について、インタビュー調査を行った。

4．研究成果

平成 21 年度は、ひとり親家族の生活史を持つ大学生に対して、ライフヒストリー・インタビューをすることで、これまでのひとり親家族の生活をどのように捉えているかを明らかにした。研究方法は、対話的構築主義アプローチのライフヒストリー研究とした。聞き手は研究者が個別に面会しインタビューを行い、インタビューは ICレコーダーに記録し、その後各自で文字起こしを行ったものを 3 人で共有し解釈を行った。

その結果、ひとり親家族で育った大学生は周囲からの差別的イメージを持たれていると感じており、そのような差別イメージに立ち向かう心の支えは友人や教師であることがわかった。またひとり親家族の大学生が語る未来の家庭のイメージは、「普通家庭」という言葉で表わされているが、その普通のイメージは語り手ごとの生活史に基づき多様なイメージが構築されている。ひとり親家族の場合、親と子が密着したイメージを築くとされがちだが、今回の語り手である子の立場からは、必ずしもひとり親の経験が親と子を密接に結びつけることにはなっていなかった。また複数の語り手から、今は築けている安定やしあわせが大事でその安定やしあわせを失いたくない、守りたいという気持ちが切実に感じられた。

このようなインタビュー調査の結果からは、ひとり親家庭庭の子どもを精神的にサポートする複数の体制が必要であることが見えてきた。公的な支援としては小・中・高の教員のカウンセリングマインドをさらに高める教職課程教育や学校カウンセラーの常置が必要であろう。

研究成果報告書を 200 部作成した。主として、その内容は、日本におけるひとり親家族に関する先行研究および韓国におけるひとり親に関する先行研究の検討結果を記載し

た。また日韓アンケート調査の単純集計項目の韓日比較を行った。特に韓国と日本で顕著な差がみられたのは、「ひとり親家族と子ども」に関してのイメージ、大学生自身の「ひとり親家族と子ども」に関してのイメージ、「ひとり親家族の子育て」に関する世間のイメージ、「ひとり親家族の子育て」に関する大学生自身のイメージであった。また大学で「家族についての講義」を受けた者は日本に多く、韓国ではその半分であった。同様に「男女共同参画」についての講義に関しても韓国のほうが受講経験者が少なかった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

- 1) , M. Takeda, K.W.Lee A. Ueno, N. Kiwaki and C. Okabe ,
"What construct social values toward one-parent families? : Analysis of university students' family images" , IFHE Jubilee-world Congress 2008 & the Research committee Oral Presentations ,2008.7.27 ,KKL Culture and Convention Centre, Lucerne, Switzerland

2) 李璟媛・竹田美知・上野顕子、「韓国大学生にみられるひとり親家族に対する意識」,第28回日本家政学会家族関係学部会セミナー、2008.10.12、大妻女子大学

3) 上野顕子・竹田美知・李璟媛、「ひとり親家庭で育った大学生のライフストーリー」第29回日本家政学会家族関係学部会セミナー2009.10.3、金城学院大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者

竹田 美知 (TAKEDA, Michi)
神戸松蔭女子学院大学
人間科学部 生活学科 都市生活専攻
研究者番号：00144634

(2)研究分担者

李 キョウオン (LEE, Kyonwhon)
岡山大学 教育学部
研究者番号：90263425

上野彰子 (UENO, Akiko)
金城学院大学 生活環境学部
研究者番号：20350952

(3)連携研究者
()

研究者番号：